

はじめに

— “世界常民学” の時代へ —

佐野賢治

2020 年は新型コロナ (covid-19) 禍で始まり、いま現在に至っても終息の気配は見え、政府は「三密」回避の励行をはじめ、「新たな生活指針」を国民に求めている。国内外の政治指導者がコロナウイルスとの戦争と表明するこの事態を歴史民俗学的にどう位置付けたらよいのか考えたとき、ブラジル奥地のインディオの生き方に啓発され、サンパウロ大学で教鞭もとったレヴィ＝ストロースの言葉、「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」(『悲しき熱帯』1955) が脳裏をかすめた。川田順造は、その意を受け、人類は地球上に仮の資格で住んでいるにすぎず、自然や他の生物との共生、共存を意識しなければ人類そのものも行き詰まり、やがて自らの破滅を招くと警鐘を鳴らしている(『文化人類学とわたし』2007)。

本書は、日本学術振興会科学研究費 15H05172 基盤研究 (B)「ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究」(代表：佐野賢治 研究期間：2015 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日)、引き続き日本常民文化研究所共同研究「同」(2019 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日)の本報告にあたるものである。研究拠点となった日本常民文化研究所は日本および近隣東アジア地域の常民の歴史民俗研究において、水産史(海から見た日本)、民具研究を主体にして独自の地歩を固めてきた。今回の共同研究は、そのなかで確立された研究視角と調査手法を、南米ブラジルの日系人社会という新たな対象へと展開する試みである。そこで、南米移民が始まった 20 世紀初頭、戦争による中断、経済成長の結果としての移出民の停止、近年の日系人「デカセギ」といった国際関係上の背景を踏まえながら、一般移民の日々の生活世界を描き出すことを第一の目標とした。まず、最初期の国策入植地、渋沢栄一が創立委員長を務めた伯刺西爾拓殖株式会社(孫にあたる渋沢敬三は 1957 年 9 月移動大使としてイグアッペ訪問「南米通信」著作集 4)、中でもレジストロを指標となる調査地とし、目に見える形で現存する民具や建築など物質文化の記録化を試み、従来注目されることの少なかった地方に残された私的な史資料を探索し読み解き、次に多くの蓄積がある移出民出身地の歴史民俗学的成果との比較を視野に入れながら、長野県人による開拓地、沖縄系・奄美系移民集住地区での調査を並行して進めることにした。

この間、毎年 3 回ほどの研究会を催し、共同研究者による現地調査や史料分析の報告のほか、中牧弘充氏はじめブラジル日系人社会の研究専門家を招いてその研究動向を学習する機会とした。また、科研最終年度の 2018 年 12 月 15 日にはその成果発表を公開シンポジウム「ブラジル日本人入植地の歴史と民俗」と題して神奈川大学横浜キャンパスで開催、レジストロ市日伯文化協会の福澤一興、清水ルーベンス両氏をゲストスピーカーに招き、現地での生活体験に耳を傾け、その後、各共同研究者からの報告を聴いた。加えて、2015 年に入植地内の日系家屋を実地調査した米田誠士氏によるドローン撮影動画の上映、会場の一角に展示された米田氏作製の日系住宅建築模型や古写真により一般参加者にも入植地生活の一端を知る機会を提供した。なおこの折、両氏から『レジストロ移民 100 周年記念誌』と日系家屋に使用された屋根瓦の貴重なサンプルの寄贈があった。これ

らの活動の成果を基にこの度、論考編・文書資料編・写真資料編の三部構成からなる大部の本報告書『ブラジル日本人入植地の常民文化』民俗歴史編が刊行されることになった（建築編も同年度刊行予定）。まずは関係各位に謝意を表したい。

さて、日本から最も離れた地球の反対側に位置するブラジル。現在、直行便はなく、どのルートでも時差の関係で片道2日かかりとなる。2010年9月末、日本航空は週3便のサンパウロ行きを廃止、この事態は年配の二世の人たちには大きな衝撃として受け取られた。臍の緒のように繋がる本国との直接的な関係が絶たれたと感じたのであろう。その一方で、日本人移民史の上から見ると象徴的な出来事として捉えることもできる。すでに、三、四世の代になると、ポルトガル語とは言わず日常的には家庭でもブラジル語で読み書き話し、片言の日本語は時たま使われる程度であり、日系人としてではなくブラジル人という意識で日々の暮らしは営まれている。ブラジルの歴史では、土着の「インディオ」、奴隷として連れてこられた「黒人」、植民者の「白人」との混血、融合によって人種、国民形成がなされたとされ（「三人種の神話」）、このことは後発の移民集団である日系移民の性格を考える上でも、日本人・日本民族のブラジル人種化、国民化としての視点が新たに必要とされることになる。

人が個人的ではなく集団として生まれ育った「故郷」を後にし、新たな「異郷」に移り住むのは、自然災害、紛争や戦争、飢饉や病弊、人口増加などを契機とし、その実行においては自発的なものから強制的な政策によるものまでさまざまな事情、背景を有する。その事由によりその後の「異郷」と「故郷」との関係は、連続性と非連続性の中で濃淡を示すことになり、異文化の中の日常生活に入り込む「海外移民」の場合は、時の経過とともにその同化の移相が問われることになる。いわば、日本人、日本民族の海外における土着化、同化力の可能性を一方では示すとともに、持ち伝えた自文化の「異郷」での受容のされ方から、その通文化的、普遍的性格の表出を認めることにもなる。戦前ブラジルに渡った日本人移民は戦後、ブラジル社会との融合をすすめ、その結果、現地社会で評価、受け入れられ、地元の名士となる人物も数多く現れた。日本の鳥居が神社を表す一方、公正・正確さのシンボルとして予審裁判所から信号機にまで使われているのを現地で見た。その一方、植民地統治下の朝鮮、満州国における日本人移民の評価には厳しいものがあつた。本報告では、海外移民史における、ブラジル移民の位置づけ、特質が信濃海外協会を事例に森武磨によりまず論じられる。

移民研究は、結果的に自文化を内なる視点から描く自画像と外からの眼、他者像を合わせることにより「日本人」論に収束されていく。その日本も出身県の県民性からそれぞれの村の村柄までのローカル性が反映し、前提となる。ブラジル移民についても、「日本人」→「日系人」→「ブラジル人」の移相の中で、その「郷土」が踏まえられながら調査・研究が展開されていく。本報告で泉水英計は、日系人社会の子弟教育を日語学校、混合学校、伯語学校と言葉の問題に焦点を当てて論じ、小熊誠は沖縄系移民の先祖祭祀を沖縄本島との連続性、加藤里織は奄美宇検村出身移民の来歴とライフヒストリーから「故郷」との心意的距離を捉える試みをしている。一方、現地に長く居住するサンパウロ大学の森幸一は、移民はすでにブラジル国民化したと、「ブラジル人」から「日本人」へと遡及する視角を、最もデリケートな宗教受容に焦点を当てて提示している。

また、今回のプロジェクトでは可視的な物質文化からこの移相を具体的に示すことも試みられた。本報告では、角南総一郎がレジストロ市サウダーデ墓地の墓碑銘と形態の悉皆調査からその変遷を示し、建築班（内田青蔵、須崎文代、田中和幸、渡邊裕子）は、2016年度以来取り組んだ民家実測調査5件の構造図とともに、窓周りの架構に特徴がみられることなどを建築編で指摘している。私が担当の民具調査は日程や調査態勢が整わず残念ながら実現できず今後の課題として残された

が、歴史的記念碑や郷土史関連書籍も含め、永井美穂は、2002年開館、2016年閉館したレジストロ日本移民史料館（1922年築造の海外興業株式会社精米所跡）の後継、新移民博物館建設への具体的な提言を行っている。

現代社会は世界的コロナ感染・パンデミックの一大要因のように、人々の移動はグローバルであり、さらにインターネットは瞬時に地域を越えて情報を伝え、人々が等身大、生活レベルで他文化を共時的に理解することが可能な時代になった。従来の人の類別、“人種”・“民族”・“国民”・“階級”を超えて、生活文化レベルでの共感、地球上の住民としての共属意識をもった“世界常民”という共通概念が今日の社会では要請される。ブラジル、アマゾンの森林火災は地元インディオの生活を脅かすとともに、世界的な食糧需給、地球の温暖化に関係していく。環境の破壊は身近な生活から国境を越えて世界中に影響を及ぼす、ローカルな問題がグローバルに直結する時代である。

21世紀に生きる人々は、まず自身の住む「郷土」を知り、国や民族を超え、生活レベルで互いに理解し、孤立ではなく共感、連帯する意識を持つことが求められる。ブラジルにおける日本人移民の歴史と現状をいわば鳥の眼と虫の目から見るといふ本報告は、これからの日本人の可能性を示唆する一助になるともいえる。さらに現今の外国人労働者、「移民」受け入れの是非をめぐる論議は、日本人の「海外移民」とリバーサルな関係にあり、現実問題としてこれからの日本社会の有り方を問う試金石であり、遠い遥かな問題ではないのである。

いずれにしろ、6年度にわたる本共同研究は、現地での多くの方々の協力のもと、このような形で纏め上げることができた。中でもレジストロ日伯文化協会、福澤一興会長、当方の泉水英計事務局長の縁の下での尽力と配慮、調査の全般に的確な目配りしてくれた森幸一教授にはここで改めて名をあげ共同研究者一同に代わって謝意を表したい。ところが、ブラジル日系社会研究の要の人である森先生は2019年10月急逝し、本報告が遺稿となってしまった、この場を借り謹んでご冥福を祈りたい。

最後に、現地入りの日数も少なく名ばかりの代表の私は、本報告書にはレジストロの墓制に係る宗教関係施設のレポートを寄せたが、2017年11月23日レジストロからの帰路、聞きしにまさるサンパウロの交通渋滞を乗り切って、サンパウロ大学で「もののけ姫」から見た日本文化」と題し講演した。非情・有情すべてに命を認める日本的アニミズム・「モノ」信仰、日本発のアニメ作品の人気とその反響に環境保全に対する関心の高さも含め、人類の可能性を認めて翌早朝ブラジルを後にした。今回のプロジェクトは私に、ブラジルという日本と最も離れた地、人種融合・多文化共生の実験地といわれる国で、「日本人とは」を人類という大きな枠の中で見つめ直す契機を与えてくれたと言え、柳田国男の「郷土研究」から「世界民俗学」への構想を「世界常民学」として展開する可能性を確信する機会となったのである。